

佳作

生命

北海道 札幌市立宮の森中学校一年 伊藤心

僕は、以前は虫があまり好きではありませんでした。なぜなら気持ちが悪いです。小さなアリやダンゴムシは触れますが、カブトムシやクワガタなどの大きな虫は触れませんでした。しかし、好きになれたきっかけがあります。

小学校五年生のとき、友達のお父さんがカブトムシの幼虫を配っていました。友達が喜んでもらっているの、僕もいちおうもらっておくことにしました。家に持って帰りましたが、母が世話をしました。母には、

「まったく世話をするの私なんだから!! たまには餌ぐらいあげてよ!!」
と、いつも怒られています。

夏が過ぎ、カブトムシも死んでこれで僕も怒られることが無くなったと安心しました。ところが、カ

ブトムシのケースを片づけているときです。母が叫びました。

「幼虫がいる!!」

卵からかえった幼虫を捨てることはできなかったの、また幼虫を飼うことになりました。

幼虫の世話は、こまめに土を替えてあげることです。僕もいやいやだったけれども母と一緒に土を替えてあげました。幼虫はどんどん大きくなり、僕はほぼ毎日、幼虫が生きているか確認するようになっていきました。僕は幼虫に「エヴァ」と名付けました。エヴァは春になるとサナギになる準備を始めました。ケースの角でサナギになったので、成虫になるのがだんだん楽しみになってきました。

七月の終わりに、エヴァはサナギのからを破って成虫になりました。少しずつ体を動かして、からからでてくるのを見たときは、

「がんばれ!!」

と、声をかけている自分がいました。

あんなに気持ちが悪いと思っていた幼虫なのに約一年土の中で過ごし、サナギからかえった姿を見て、僕はとても感動しました。

今まで、虫なんてどうでもいい存在だったけれど、

幼虫から成虫になる姿を見て、改めて虫も大切な生命なのだと感じました。エヴァは死んでしまったけれど、カブトムシたちがいてくれたおかげで大切なことに気づくことができました。

僕は将来、医師になろうと思っています。医師は、人の命を助ける仕事ですが、病氣の人々は、それぞれ違う背景をもっています。今もまだ大きな虫は触れないけど、人間と同じように全ての生命は繋がっているのだということをいつも心に感じながらこれからも生活していこうと思います。